

## ノーベル賞受賞のお祝い

西村 純

小柴さん、このたびはノーベル賞受賞お目出度う御座います。

1987年は、宇宙科学研究所ではX線科学衛星「ぎんが」を上げた年です。衛星が軌道にのって、すぐ、銀河系の隣にある「大マゼラン星雲」に超新星が発生したという報せが入ってきました。超新星爆発が近くで起こるのは数十年に一回と言う希なことで、爆発にともなうでてくるX線観測の絶好のチャンスではないかという報せでした。小柴さん達はこのころ神岡のデータをしらべて、超新星爆発にともなう発生したニュートリノが11個観測にかかった事を発見していました。小柴さんはすぐ小田さん（当時宇宙科学研究所所長）に連絡してこられて、私も小田さんからそのお話を伺いました。ニュートリノ天文学の幕開けだなと思ったことです。

小柴さんは私とほぼ同じ年令と言うこともあって、若い頃から、色々な場面での付き合いが続いています。学生の頃は経済状態のこともあって忙しく、大學に余り出席出来ず、ビリだったよと言っていました。研究の話になると独創的な考察を述べて、いつも感心させられていました。この話を聞いて、成績が悪くても大丈夫と安心する学生さんもいると思いますが、彼は暇を見つけては勉強し、先輩に教えを請い、天性の優れた独創的な直感に磨きを掛けていた事を書いております。卒業して暫くして、ロチェスター大學の大学院の奨学学生に推薦され、あっという間に、アメリカでの宇宙線研究の若手のホープになっていました。ついで、シカゴ大學の宇宙線研究の大家シャイン博士に招かれて、シャイン博士の没後には遺志を

ついで、国際共同研究の大プロジェクト「大型原子核乾板による気球観測」を成功に導きました。後年、カミオカンデのような大型プロジェクトを成功に導いた経験を積んだ事になったのかもしれませんが。考えてみるとこの時期は、小柴さんが20代の後半から30代の初めの事で、若い人が活躍する最近では考えられないような時代でした。

大変面倒見の良い人で天衣無縫、私が1950年代の終わりに初めて外国に出張するときに、在外経験の豊かな彼は諸先輩の失敗談を交えて、こまごまと外国での心得を教えてくれ、帰りにシカゴに滞在出来るよう、そのための給与をシャイン先生に交渉してくれました。私がシカゴに着いて、ある日、友人から、「小柴先生という方を知っていますか？」と聞かれました。「この間、日本から来た雑誌をみたら、100回の見合いを終えてという手記がでていたけど、すごい人があるものですね・・・」というのです。小柴さんに話したら、「30回位までは覚えていたけど、それ以上は覚えていないよ・・・」とにやにや笑っていました。

今回は「天体物理学、とくに宇宙ニュートリノ検出へのパイオニア的貢献」ということで、ニュートリノのデービス博士とともに受賞されました。新しい天文学ということでX線天文学ではジャコーニ博士が受賞されましたが、小田さんがご存命でともに受賞されたらますます良かったのにと残念でなりません。

新しい天文学の始まりという画期的なお仕事の成功に敬意を表し、改めてお祝いを申し上げます。

（東京大学名誉教授／宇宙科学研究所名誉教授）